

## 「生徒が問いを創る授業」

主幹教諭 齊藤 祐介

今年度、石神井西中学校では「学習指導」のひとつとして「効果的にICTを活用することで、「生きる力」を身に付けるための課題発見・問題解決を中心とした「生徒が問いを創る授業」を一層推進する。」ことを重点取組としています。各授業や校内研修において一人一台端末を効果的に活用して課題解決学習に取り組んでいます。

そこで「生徒が問いを創る授業」とはどのような流れで行われているかの一例を紹介します。

### 主なルールやながれ

- ・教員は生徒が「不思議だな」「気になるな」「どうしてだろう」と疑問をもつようなお題「不思議のタネ」を用意する。
- ・生徒は「不思議のタネ」に対し、さまざまな疑問を考える。
- ・疑問ひとつにつき、付箋を1枚使って書く。
- ・できるだけたくさんの疑問を個人で挙げる。
- ・書き上げた付箋を4人組で交流・紹介する。
- ・疑問の答えがわかって、自分の答えと比べ合わせてみる。
- ・相手の疑問に対して考えを深める。
- ・付箋をとりまとめ、疑問ごとに分類する。
- ・出てきた疑問の傾向を見極め、課題を精査し、解決に向けて学習する。



### 実践例

#### 国語2年 単元「短歌の世界」

- ・不思議のタネ 『「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日』 俵万智 作 短歌
- ・生徒の疑問例 『「この味」ってどんな味?」「君って誰?」「誰がこの場にいるのだろうか?」「なぜ七月六日?」「俵万智って誰?」「これって短歌なの?」「俳句とは違うの?」「サラダ記念日って本当にあるの?」「この短歌が短歌っぽくないのはどうして?」
- ・疑問まとめ 「短歌って何だろう」
- ・課題解決学習
  - ・和歌の歴史について、動画で学習する
  - ・短歌の基本の学習 リズム 五・七・五・七・七 上の句 下の句 句切れ・切れ字について
  - ・音読による読み心地の良さの体感 現代短歌の特有のリズムのおもしろさの体感
  - ・音数の少ないことによる表現の難しさ → 言葉の精選が必要
  - ・説明しきらないことで読み手に鑑賞の幅を与え、読みを交流するおもしろさ
  - ・この短歌の登場人物 彼と彼女? 親と子? それ以外? 鑑賞の交流
  - ・教科書に出てくる短歌を2首取り上げ、それぞれ鑑賞し、観点を絞って比較を行う。
  - ・学んだことの振り返り

生徒たちは自分たちで出した素直な疑問から、日本の伝統文化の一つである「短歌」のもつおもしろさや奥深さを学ぶことができました。

さて、この「生徒の言葉で問いを創る授業」は高知大学教育学部教授の鹿嶋真弓先生と桜美林大学教職センター教授の石黒康夫先生が提唱されている授業方法です。石黒先生には昨年度、校内研修の講師としてご講演いただきました。お二人は共著の書籍のなかで、「意欲がなければ学んでいても身につかない。これは私たちも経験上よく理解できることです。では、意欲のもとになるものはなんでしょう。」と問われていました。そしてその意欲のもとになる一つとして「知的好奇心」を挙げられていました。当たり前に見えることでも「なぜだろう?」「不思議だ」「えっ、どうして?」「本当にそうなのかな」と思える態度や心が「知的好奇心」であり、「学びの原動力」となります。生徒たちには日常の当たり前を何となく見過ごすことなく、多くのことに疑問を感じて探求して欲しいと願っています。

【参考資料 『問いを創る授業 子どものつづやきから始める主体的で深い学び』